

14

饗庭東庵門下の伝承についての一考察

加畑 聡子, 星野 卓之, 小田口 浩, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所

【緒言】

江戸時代の後世方派の中でも、『素問』『靈樞』『難経』を講じ、とりわけ運氣学説には精通した一派は「劉医方」すなわち「後世家別派」と位置付けられてきた。その始祖とされる饗庭東庵（1621-1673）は、曲直瀬玄朔（1549-1631）に学び、門下に味岡三伯（1629-1698）を始め著名な医者を多く輩出したが、その学術の伝授形式については解明されていない点が多い。そこで本発表では、饗庭東庵の学統に連なる後世派の学術と伝承についての理解を試みる。

【方法】

饗庭東庵の門人と見られる雲庵（生没年不詳）撰『医学授幼鈔』（刊年不詳）、味岡三伯の伝と見られる『切紙弁』（書写年不詳、京都大学富士川文庫所蔵）ならびに『三伯先生医書』（刊年不詳、京都大学富士川文庫所蔵）、現存する味岡流門下の切紙にあたる浅井周伯（1643-1705）撰『切紙之弁』（刊年不詳、京都大学富士川文庫所蔵）、堀元厚（1686-1754）撰『医学切紙伝授』（書写年不詳、武田科学振興財団杏雨書屋所蔵）、小原春造（1762-1822）撰『切紙伝通解』（1812年写）の内容を比較し、小原春造門下である梯謙（生没年不詳）『隧穴啓蒙』（1831年刊）の記載と併せて検討することで、饗庭東庵門下の伝授の態様について検証する。

【結果及び考察】

『医学授幼鈔』は二部構成からなり、上・中冊「切紙弁断」は、下冊「切紙」の弁断すなわち論説として「家伝切紙」のほぼ全文が転載され、その内容についての解釈が加えられている。「切紙弁断」には、曲直瀬道三の切紙に倣って講習では語り尽くし難い内容を著述したこと、『内経』の記載に自身の見解を加え、陰陽五行論、蔵府経絡論、運氣論などが講じられている。『切紙弁』は、『三伯先生医書』を縦本で再版して齧頭注をつけたものであり、表紙裏には、師からの口伝を道三流の切紙紙片のように離散しないように一書にまとめられたものであること、『素問』に記載される奥義の中でも理解しがたい内容を説いたことが記されている。その内容を「家伝切紙」と比較すると、『靈樞』骨度に記される側身の長さを「都合七尺五寸（口伝）」とする点で一致し、口伝によって継承された記載が散見する。その学統に連なる『切紙之弁』『医学切紙伝授』『切紙伝通解』と「家伝切紙」の内容を比較すると、簡略化され、文字に異同はあるものの、「五臓六腑」「十二経脈」「五運六氣」の項目において一致が見られた。さらに時代が下って著された『隧穴啓蒙』自序には、深奥な『黄帝内経』の通曉は困難であるものの、隋唐以降の注釈家によって、かなり明らかになったこと、その一方で、経穴については誤りが多く、堀元厚が『隧輪通攷』（1744年自叙）を著すことにより、経穴についての解説は詳細を究めたが、その内容は口伝された嗣子玄昌と岐山澤法橋でなければ理解しがたいことが記されていた。そこで、『隧穴啓蒙』を著すことで、初学者が口伝を受けずとも堀家の経穴学を理解し、古医書を読解する手立てとなることを期待していた。このことから、口伝から筆記による伝授が重視されていく経時の変化が窺える。

【結語】

饗庭東庵及びその門下の伝授書から、医古典に基づく五臓六腑や経脈学説、運氣論を重視し、口伝を著述によって継承していく、後世別派の伝授形式の様相を窺うことができる。

本研究は、平成29年度武田科学振興財団杏雨書屋研究奨励「江戸時代医学公教育形成と実証性に関する基礎的研究」、JSPS 科研費 JP20K129053D の助成を受けたものである。